

刻主上御年崩黒戸、

〔續史愚抄後花園〕正長元年七月廿八日戊寅、自東洞院殿院御渡御三條前、右大臣公光土御門高倉

第爲假被行踐祚禮御年左大臣持基改關白爲攝政、依嘉承例宣命爲院詔者、公卿昇殿勅授帶劔牛

車如元殿上人禁色雜袍御宣下、自土御門殿舊主劔璽渡御不讓位而崩時、當公卿攝政持已下十人

等供奉、次内侍所渡御、次將辨官等供奉、已上奉行藏人右中辨忠長、傳奏萬里小路大納言時房、

〔山賤の記〕舊院花園いまだいとけなき御程は、伏見のさにとぞだゝせたまひて、十の御とし正長

元年にはからざるに御くらゐにつかせたまふ、

〔椿葉記〕此六月元年の頃より御なう猶おもしろせましくて、まうけの君の御事、世にさまぐ

申程に、七月のはじめ、嵯峨にまします南方の小倉殿親王と申、御逐電ときこゆ御位のものぞみ

にて御謀反のくはだてあるよし、世の中騒ぎ申はどに、七月十二日夜中ばかりに世尊寺宮内卿

行豊朝臣伏見殿へはせまゐり、三寶院准后の御使にて、室町殿義教より申さるゝ趣は、宮御方

○後花園明日日京へなし申されよ、まづ東山若王子へ入申されて警固申さるべきなり、あか松左京大

ほせつつ御服などは勸修寺に仰付らる、御迎には管領參べしと申されしかば、宮中上下のひしめ

き夢うつゝともおぼえず、めでたさも、申もなほざりなるこゝちして、にはかの御いでたちかた

の如くとりまかなひて、御迎へを待ほどに、十三日の夕方はどに、管領の手の者ども四五百人參

りぬやがて出御、御輿にて内々若王子へ渡御なりぬ、○中略さて室町殿より關白二條を以て、事の

子細を仙洞小松へ申さるゝほどに、同十七日、仙洞へ入申さる、室町殿より御車番頭いよゝ參

らせらる、綾小路前宰相、庭田三位御車の後にまゐる、長資朝臣、隆富朝臣供奉す、管領父子まゐる、

御車の前後に數百人警固に參れば、道すがら見物の人も多くて、月はことさらすみ渡りて、御行